

所長・歴代部長のメッセージ

まさに節目の時

所長 西澤 清 (H28～現)



長野県では平成8年、環境基本条例を制定し、当所の前身である自然保護研究所を設立しました。条例前文の「環境の恵沢を享受する権利」と「将来の世代に引き継いでいく責務」の具現化の第一歩でした。世界を見渡すと、日本の自然の豊かさ、特に本県の生物の多様性に気づかされます。その地にあり、自然環境への脅威が迫り続ける中、研究所設置から20年がたちました。理想に近づいているか自問自答の毎日です。昨年の行政機構審議会では、県の研究機関のあり方の議論の必要性が提言されました。地域振興局設置が決まった今、最重点課題です。条例で示された原点に返り、県行政の科学的バックアップという軸足を外さず、県の将来のため、腰を据えて議論してまいります。今まさに節目の時、しっかりと職責を全うしたいと思います。最後に、時代が刻々と変化の中、研究所の使命を模索し続けた歴代所長の名前を、敬意を表しつつ掲載させていただきます。宮脇昭(H8～15年度)、青山貞一(H16)、竹松政博(H17)、荒井英彦(H18)、鷹野治(H19)、原隆文(H20)、牧野内生義(H21)、荒井高樹(H22～23)、中村茂弘(H24)、倉沢幸一(H25～26)、藤森靖夫(H27) (敬称略)

裏方の能力アップが鍵

自然環境部長 陸 斉 (H26～現)



研究所発足当初から、県民目線で足下の課題に取り組むことが求められていた。それは今でも変わらない研究所の基本姿勢ではあるが、地域の個別課題の中には、それだけを扱っていたのでは解決しにくいものもある。例えば、気候変動の地域影響への対応などは、世界や国の動向に合わせて動いた方が成果を得やすい。研究所は2010年から5年間、地域での気候変動適応策推進を目指した環境省の大型研究プロジェクトS-8に参加することができた。S-8は14大学を含む国内の29研究機関から91名が参画するプロジェクトで、研究所は約4千万円の研究費を得て、国内第一線の研究者の方々と共同で、県内の気候変動適応を進める研究に取り組んだ。現在も、S-8の成果を引き継いだ文科省のプロジェクトSI-CATへ参加し研究を続けている。この間に培った県内外の研究仲間との関係は、研究所の大切な宝となっている。

今後さまざまな形で共同研究の機会は訪れると思うが、それを支える裏方の能力(事務処理力)を同時に高めていく必要がある。それが現在直面している、飯綱庁舎のちょっと大事な課題である。

グローバリズムと信州の自然

岸元 良輔 (元・部長 H24～H25)



この20年間、グローバリズムがさらに拡大し、世界の画一化がどんどん進んできています。そのような中で、地域の特徴と価値を見直し保全することは、これまでになく重要になっています。信州に特徴的で豊かな自然と、それに結びついて育まれてきた文化は、長野県民の生活基盤であり、かけがえのない大事な財産です。ところが、県民にとって、その価値は当たり前すぎてかえって見落とされがちです。近年、国内だけでなく海外からも多くの観光客が訪れ、むしろ外からの目によってその価値が再発見されています。例えば、棚田とそこに生息する多様な生き物は、水田に馴染みのない欧米人にはこの上ない魅力でしょう。しかも、人間の文化と結びついた身近な自然環境であるうえに、その背景には日本アルプスの雄大な景観が広がっています。このような自然と文化を大切にすることこそ、これからの地域振興につながります。信州に特徴的な自然と文化を再発見し、調査研究して資料を蓄積し、普及啓発することは、これまでと変わらず研究所の大きな役割です。今後、ますます研究所の活躍が期待されます。

生物多様性情報センターとして発展を!

大塚 孝一 (元・部長 H16～H23)



自然保護研究所発足6年目の平成13年に植物生態担当として、研究所に異動してきました。農政部の技術職として行政・普及分野の仕事に就いていましたから、研究職としての勤務は初めてでした。退職までの11年と再任用5年の期間研究職に就けたことは大変ありがたく、十分な貢献ができたのか申し訳ない気持ちもあります。平成16年に環境保全研究所に統合された時からチームリーダー・部長としていろんな場面での牽引役を務めてきました。動植物や地質、気象などに関する問い合わせは、県民に限らず報道関係者からも多くあります。それらに答えられるには、地道に蓄積された基礎的な情報なくしては答えられません。一つの事例として、長野県版のレッドデータブック作成に関して、長野県植物誌や植物標本庫のデータが活用されたりしました。動植物の分布をはじめ生物多様性に関する情報の蓄積も大切です。さらにどのような形で公開していくかも今後の課題です。今後も地道な資料収集を続け、生物多様性の情報センターとして発展していただきたいと思っています。

■研究事業を支えた12名の次長(在任期間)

- ◆自然保護研究所 (H8 [1996]～H15 [2003]) ①甲田真幸 (H8～9) ②神林幹生 (H10～12) ③山崎藤雄 (H13～14) ④原 修二 (H14) ⑤中村 慎 (H15)
- ◆環境保全研究所・飯綱庁舎 (H16 [2004]～現在) ①中村 慎 (H16～17) ②倉沢明人 (H18～19) ③松村 久 (H20) ④武田雅宏 (H21～23) ⑤大日方敏郎 (H24) ⑥中村 勤 (H25～26) ⑦佐藤 繁 (H27) ⑧阿部勝彦 (H28～現在)



H29年2月17日撮影

研究所20周年にあたり 現スタッフからひと言

自然から学ぶ楽しみ、これからも 阿部 勝彦 (次長)

研究所は、長野冬季オリンピックに係る自然保護が設立の契機でしたが、二十年を経た今、長野県の自然を探求するという点で、着実な歩みを積み上げています。「山カフェ」や「信州自然講座」などにも、さらにファンが増えるとうれしいな…。今後益々、研究所が発展し、長野県の宝物となるためにも、研究員に対する期待は大きいです。二十周年の記念すべき年に、栄えある次長に就任したのも何かの縁、残る私の人生においても、研究所と関わり、自然を学ぶ極上の楽しみを味わいたいと思います。

抱える課題の大きさに驚きつつ 黒江 美紗子 (哺乳類生態)

この20年間で哺乳類を取り巻く状況は大きく変わりました。シカ、イノシシ、クマ、どの動物も数が増えているのか身近な場所に出没するようになりました。動物たちと良い距離を保ち、うまく付き合っていくにはどうしたらよいのか、先輩方が蓄積してくださった情報や知識をもとに取り組んでいます。一方で私自身は、出産・育児という哺乳類としての大変さも味わい、ようやく哺乳類の仲間入りを果たした気分です。まだまだ長野初心者、長野県の豊かな自然やそこで暮らす動物たちを味わっていききたいです。

自然史王国信州とともに 富樫 均 (地形・地質)

「オリンピックと自然保護」、「里山の過去・現在・未来」、そして「生物多様性の保全」や「環境変動への対応」等、この20年の間にも時代の動きとともに研究の幅が広がり、経験とデータの蓄積がすすみました。これからは、そのデータをどう生かしていくかが問われます。現場から得られた研究成果は、研究所や研究者のためにあるのではなく、再び人々が暮らす生活の場に生かされなければなりません。自然史王国であるこの長野県の県土は、確かな保護と賢い利用の裏づけがあってこそ、世界に誇れるものになるだろうと思います。

緩和策から適応策へ 浜田 崇 (気候・気象)

1997年。気候変動枠組条約第3回締約国会議 (COP3) が京都で開催され、温室効果ガスの削減を定めた京都議定書が採択されました。今では、二酸化炭素など温室効果ガスの削減対策 (緩和策) は広く認知され、新エネルギーの導入や省エネ行動の実践が当たり前の時代になりました。ここまで20年を要したことになります。2015年。パリで開かれたCOP21では、京都議定書に続く新しい枠組、パリ協定が合意され、将来の気候変動とその影響に対応するための対策 (適応策) が新たに明記されました。現在、この適応策に関わる研究をしています。これがあたりまえの社会になるまで、もうしばらくがんばる必要がありそうです。

過去と未来に、 深く、根を下ろしたい 須賀 丈 (昆虫生態)

この20年、自然と社会の関係は静かに変わってきたのではないのでしょうか。気候変動や生物多様性への関心が少しずつ広がる一方、人口減少の時代がはじまり、地域再生の動きもさかんになってきました。そのあいだにマルハナバチや草原の歴史を調べ、レッドリストをつくり、改訂し、希少種保護や草原保全のお手伝いをしてきました。ここからさらに地域と地球の環境の深く大きく変わりつつある歴史の動きにつながって、未来にも根を下ろしたい。そのため何ができるのか、地球史を遠くにながめ、信州の山々と花や虫の姿をも見つ、形にしていきたいと思います。

仕込んで醸す次なるステージに 北野 聡 (陸水生熊)

長野に着任して以来、上高地梓川、白馬落倉台地、野尻湖、木曾川、千曲川、南信濃など、魅力あふれる各地のフィールドを歩くことができました。これからも信州の水生物について標本や分布情報を幅広く集め、多様な生物相の理解とその保全につなげる仕事をしてゆきたい。一方、分野1名の体制は時として孤立、他人任せになりがちという負の側面もあります。適度に混ぜり合いながら成果を醸す次のステージに期待しています。

素晴らしい環境に感謝して 大和 広明 (気候・気象)

研究所にきた年が20周年という節目にあたり、研究所との縁を感じます。私が長野に初めて来たのが2003年の大学の巡検の時でした、そのときに巡検の手伝いをしていただいたのが、研究室の先輩でもある浜田さんでした。今思えば、そのときから研究所に縁があったのだなと感じます。研究所が環境保全という名前にふさわしい、自然豊かな場所にありますので、ダイナミックな四季の移ろいー雪解け直後の芽吹き、野鳥やセミの鳴き声、落葉するカラマツ、そして厳しい冬の多雪などーを肌で感じられます。今後もこの素晴らしい研究環境が受け継がれ、長野県の豊かな自然環境の保全に役立つことを願っています。

山の恵みを未来へ 浦山 佳恵 (人文社会)

信州には野生動植物を利用した古い伝統行事や祭りの形が多く残っています。そして同じ行事でも地域によって多様な動植物が用いられています。例えば、お正月の門松を今でも山から迎える地域が多く、マツではなくソヨゴ、ツガ、ヤナギ等を用いる地域もみられます。これは信州の生物多様性の豊かさとともに人と山との精神的な関わりを深さを示していると思います。新しい文化を築くために、これからも伝統的な暮らしを学び伝えていきたいと思っています。

どう後始末をつけようか 堀田 昌伸 (鳥類生態)

あらためて20年を振り返ってみると、右も左もわからない設立当初に関わったカヤの平ブナ林の鳥類群集、サシバやハチクマなど希少猛禽類の生息状況、県版レッドリスト作成のための情報収集、霧ヶ峰における草原性鳥類と草原管理、風力発電計画に関連してイヌワシやクマタカなどへの影響想定マップの作成、ライチョウの温暖化影響予測など、いろいろな人と関わりながらやってきたように思います。ずいぶん、食い散らかしてきたように思います。そろそろ、まとめをしなければと思う、今日の頃です。

百年先も…

石田 祐子 (植物標本庫)

20年前、私はまだ小学生でした。そう思うと、20年はとても長い時間を感じます。でも、私が扱っている標本には、古いもので90年前のものもあります。こうして、何十年前に作られた標本が今、私の目の前にあって、しかも活用されている。この標本を作った人はどんな思いで作っていたのだろうか、少し不思議な気持ちになることがあります。私もそんな標本を残していきたいです。そして、10年先も、100年先もその標本が使われますように、研究所が、標本庫が続いていきますよう、陰ながら支えて行きたいと思います。

高山植物の一生から見た20年

尾関 雅章 (高山生態)

色鮮やかで、でも小ぶりの姿をしていることが多い高山植物は、なんとなく短命ではかないもののように見えるかもしれません。でも、高山植物の暮らしぶりを自然保護研究所・環境保全研究所を通じて調べてみると、意外に？寿命が長いことに気づきました。芽生えた直後から成長の様子を観察しつづけているものもありますが、まだまだ花もつけません (この先20年たっても開花する姿に会えるかどうか…)。そんな高山植物の一生から見れば、20年なんてほんの一瞬です。でもほんの一瞬とらえた中から信州の自然に魅力に迫ることができたらと思います。

気候変化を捉える

栗林 正俊 (気候・気象)

20年前、私はまだ中学生でした。当時、霧ヶ峰で合宿があり、八島湿原を皆で散策して自然の豊かさに感動したものです。自然の中で研究したいと思っていた私は、2年前から環境保全研究所の一員となり、気候変化について研究するようになりました。2016年には長野県内の多くの地点で年平均気温が観測史上最高を記録して、今後の動向が注目されます。また、気候変化が身近な生き物に与える影響を調査するのにも絶好の位置に研究所があるので、地の利を生かして研究していきたいと思っています。